

第2編6章解説

第2編第1章～第5章では、琵琶湖流域での、階層化された流域管理システムをもとに、農業濁水問題を事例とした、本プロジェクトの流域管理研究の取り組みを解説している。この琵琶湖流域とともに琵琶湖－淀川水系を構成する下流の淀川流域（淀川下流域）は、上流の琵琶湖流域とは対照的に都市域が広がる。私たちは、琵琶湖流域での研究活動の上になんて、淀川下流域においては、水質・水環境に関わる主要な問題構造を抽出し、琵琶湖流域で展開した流域診断や流域管理の考え方が、どのように適用できるかをまとめることを目標としてきた。第2編第6章では、その成果を解説している。

第1節では、最初に琵琶湖流域と対比した淀川下流域の特徴をまとめ、次にその問題構造について、第6章全体のエッセンスをまとめている。

第2節では、まず、メソ・ミクロなスケールから、淀川下流域の視察を出発点に、淀川下流域の取水と排水の「見えない」複雑なネットワークを、データと考察によって評価する。次に、本章5節で展開するマクロスケールでの取水・排水ネットワークの可視化とともに、メソ・ミクロスケールという、身近な河川環境での生活とのつながりの中で、各地域の人々が水系から受け取る「益」を明らかに（可視化）し、議論できる場を育てていく必要性を説く。

第3節では、琵琶湖・淀川水質保全機構、大阪湾再生推進会議をはじめとした、淀川下流域の水環境に関わる代表的な公開資料・既存研究を下に、マクロスケールの視点から、淀川下流域～大阪湾の水質・水環境に関わる重要な課題を整理している。この作業の上になんて、第1節の問題構造の抽出がおこなわれたのである。

第4節では、やはりマクロな視点に立って、淀川河口～大阪湾における、富栄養化、赤潮の発生頻度や貧酸素水塊が形成されるメカニズムを整理している。琵琶湖－淀川水系での人間活動による流域負荷は、個々の流域や地域の水環境への影響はもちろんだが、淀川水系全体のマクロな視点から見れば、最終的にその負荷が流れ込む、淀川河口～大阪湾の生態系への影響が、流域共通のエンドポイントとしての重要性を持つのである。

第5節では、淀川下流域における取水・排水ネットワークを可視化する作業を試みている。これまで別々に扱われていた、淀川下流域における取水・排水に関わる情報を、ひとつの水系ネットワークの地図に集約することで、負荷に関する水・物質循環レベルでの基礎情報をデータベース化し、マクロスケールでの共通の議論の場として発展することをねらっている。

この第2編第6章の議論を受けて、第3編第2章第1節において、階層化された流域管理システムの視点から、淀川下流域、琵琶湖－淀川水系の流域管理への提言がなされる。

谷内茂雄